俳句トークを繰り広げる梅沢富美男さん（左）

俳句対局決勝戦

平成26年８月25日、松山市は「俳都松山宣言」を発表しました

俳都松山を宣言した松山市では、夏井いつきさんを俳都松山大使に任命し、俳句と松山の魅力をPRする事業を行っています。

平成28年10月には「俳都松山宣言2016〜十七音が景色を変える〜」を開催し、俳優の梅沢富美男さんと夏井いつきさんによる俳句トークショーと、囲碁や将棋のように向かい合い、制限時間内に俳句を作り合って即吟力を競う「俳句対局」を行いました。着物姿で登場し、句作の幅広さでも会場を魅了した北大路翼さんが優勝しました。

❶ 松山市立子規記念博物館

「人間正岡子規」をテーマに、俳句や新体詩、短歌などの実物を展示。平成29年４月に常設展示室を一部リニューアル。

■住/松山市道後公園1-30
■問/☎089-931-5566
■営/9:00〜17:00（5〜10月は〜18:00）
火曜休館（祝日の場合翌日）

❷ 松山市庚申庵史跡庭園

1800（寛政12）年に栗田樹堂が建てた草庵を、当時の趣を尊重して復元した。桜やノダフジに彩られた風流な庭もある。

■住/松山市味酒町2-6-7
■問/☎089-915-2204
■営/10:00〜18:00
水曜休園（祝日の場合翌日）

❸ 一草庵

自由律俳人・種田山頭火の終の住処となった庵。山頭火は松山の人々に支えられ、ここで10ヵ月を過ごし、生涯を終えた。

■住/松山市御幸1-435-1
■問/☎089-948-6891（松山市文化財課）
※内部の見学は問い合わせを

JR松山駅に佇む子規の句碑

多くの句碑が点在する俳句の道

子規記念博物館内に再現された愚陀佛庵

路面電車にも掲示される「ことば」

子規が通い、漱石が教鞭をとった松山中学校の跡を示す碑

俳句とまち歩きのハイクを掛けて専属ガイドと歩く「松山はいく」

コラム Column ここがいい、加減。

俳句の風景が残る贅沢なまち松山

愛媛大学教育学部准教授（近現代俳句研究者）
青木 亮人さん

松山には「俳句」の風景があります。それは正岡子規や高浜虚子の故郷というだけではありません。子規と夏目漱石が連れ立って歩いた道、虚子が子どもの頃に眺めた北条の景色が今も残り、若き日の彼らが見上げた松山城はいまだ青空に聳えている。種田山頭火と同じように道後温泉本館の暖簾をくぐり、子規たちと同じように三津浜港から揚がった魚に舌鼓を打ち、高浜港の夕日を愛でる。「俳句」を愛した彼らを懐かしみつつ、当時と変わらぬ松山の風景を眺め、歩き、食べるひとときー——贅沢だと思いませんか。

俳句甲子園

西ノ下大師堂内にある高浜虚子の胸像

松山市中心部で開催される俳句甲子園

俳都松山を歩く

俳都の風に吹かれて、身近に感じる文学

幸せ探訪

松山は俳句のまち。たくさんの有名な俳人が生まれ、今も俳句や言葉の文化を大切にしています。街角で出会う句碑や俳人ゆかりの庵、そして文学のミュージアム。"いい、加減。"な文学散歩を。

松山が生んだ近代俳句の祖、正岡子規。1867（慶応3）年に生まれ、幼い頃より漢詩や回覧雑誌の編集で才能を発揮しました。18歳で俳句を嗜むようになり、俳人・大原其戎の手ほどきを受けて本格的に句作を始めたといわれています。病のために34歳で他界した子規ですが、その短い生涯で残した俳句は約2万400句にも及びます。また俳句と短歌の革新運動にも力を費やし、近現代の短詩型文学の方向を位置づけたことでも高い評価を得ています。その作風は西洋美術の考え方を取り入れた「写生」を重んじたものでした。そんな「文学界の功労者」の周りには、多くの人々が集まってきました。盟友の夏目漱石もその一人で、また高浜虚子や河東碧梧桐ら素晴らしい文学者たちの存在も、子規が残した功績といえます。

ほかにも松山からは、小林一茶とも親交が深かった江戸時代の俳人・栗田樹堂、人間探求派と呼ばれる中村草田男、石田波郷ら素晴らしい俳人を輩出しています。漂泊の俳人・種田山頭火が終焉の地に選んだのも松山でした。

今も市内にはこうした俳人ゆかりの庵や顕彰碑が点在し、句碑や俳句ポストがそこかしこに。そして「俳句甲子園」を代表に、老若男女が俳句に親しむことのできる催しが市内各地で開催されています。平成26年には「俳都松山宣言」を発表し、国内はもちろん海外にまで、「俳句のまち」として松山の魅力を広く発信しています。

道後温泉にも俳句ポストがあるよ！

Masaoka Shiki, Japan's most famous haiku poet, is from Matsuyama City. Many other haiku poets have come from here, and the citizens of this city place great importance on the culture of haiku and words. Literary museums and events have become specialties of this city.

■ 正岡子規とは

1867（慶応3）年、伊予国の松山藩士の子として生まれる。幼時に父が他界したため家督を相続。少年時代から漢詩や回覧雑誌の編集などに親しむ。1883（明治16）年に上京し、第一高等中学校で夏目漱石と親しくなる。第一高等中学校在学中の21歳のときに喀血。その頃から自身をホトトギスとなぞらえて、「子規」と名のるように。大学中退後、新聞記者をしながら俳句や短歌の革新、新体詩に挑戦、病気と闘いながらも34歳で亡くなるまで精力的に創作活動に取り組んだ。また、松山に野球を初めて伝え、数々の野球用語を作ったといわれ、2002（平成14）年、野球殿堂入りした。